

高齢者大学文芸部 1月歌会

枝先を離るる時にかそかなる音立つるなり山茶花の雪
梅野かをり
槇の木の姿ととのふ冬姿わが空白のころ預けむ
岡本 トシ
星ひとつ流れてふるさと静かなり亡き友偲ぶ雪降る夜は
北村ツギ子
托鉢の僧に会ひたり霜の朝自転車下りていささかの喜捨
今坂 文子
わが庭につつましく咲く寒菊の松のかたへに彩り添ゆる
小池ミエ子
亡き母の手打ちし運そば音たてて食みし香き日家族に在りて
川口 敦子
年の瀬に曾孫の名前忘れしと年玉袋持ち来し母は
中原 光子
玻璃戸ごし松ヶ枝の雪眺めりて雪害重き北国思ふ
岩木タエ子
現世の汚職鎮めし白銀の空に遠世のごとき半月
山下 菊代
五十路を知らず逝きたる母想ふ八十路の坂を越ゆる吾はも
佐々木佐江子

万句の里俳句会 12月句会

餌をやる人に集まる鴨の群
野中 公枝
初雪や心の隙間引きしめる
隈部 輝子
歌碑に舞ふ風花ひらりひらりかな
田島 房子
古城趾はいよいよ静か冬木立
加藤 妙子
電線の雀も吾も着ぶくれて
北村 妙子
日の差して雪嶺神として仰ぐ
平山 邦子
注連作り氏子の意気の伝はりし
宮本 雅子
境内に人影もなく散紅葉
林 まつ子
山茶花の白つつましく神の庭
富田 幸子
白菜の程良く干して重ね石
茨木 幸子
裸木の尊き姿神の庭
緒方 玲
影残し笛鳴枝を移りけり
松永 久子

肥後狂句桜会 12月例会

思い直し親の意見に頷かす
東 栄次
ああ寒さ 忍者の如たる隙間風
狩野 本六
勝手なもん ストレス溜まる筈の無ア
藤由 藤紫
思い直し 採決の時ア起立さす
田中 孝幸
ああ寒さ 毛布の欲しいホームレス
須藤 新生

せせらぎ俳句会 12月例会

闇汁に笑ふ顔がほ浮かび来る
まつえ
なつかしき味にまた会ひ闇汁会
数 恵
玉杓子何を射とめん闇汁会
和 子
闇汁の底に溜りしむかご粒
泊 虹
闇汁会佳き年願ひ掬ひあひ
アツ子
闇汁に一期一会の箸を取る
邦 治
冬至待つ納屋の南瓜を出しもして
民 子
大雪の予報マフラー確かと締め
鈴 子

肥後狂句水笑会 12月例会

あばるるな 埃の立っておこなえん
水 光
あせくって 当たつとらんかと確かむる
美 由
あげくの三八とうとう親が尻ぬぐい
五 女
うっ冷めて 別々の部屋寝る夫婦
左 党
飛び付いて アナのよろつく三つ鐘
好 茶
あげくの三八金の値打ちが分からない
三 代
あせくって 浮気の証拠さがし出し
三 水

七城短歌会 12月詠草

あばるるな 五衛門風呂がつつぼげる
千 笑
飛び付いてちぎった柿ばつこきアた
江 彩
あげくの三八鉄筋がビルうちこわす
英 坊
干し柿の簾作れる納屋があり我も競いて吊しは遠き日
岩下ミツエ
吹き返すたまさかの風に豆脱穀の排塵真面に顔をそむくる
佐々 重弘
露天風呂に浸りてしばし世の中の動きを余所に目を瞑りいる
岩崎 清継
通院の車窓に見ゆる 鳩 枯れ葦の間の水面を駆ける
村上 幾雄
阿蘇路行く小雪の中に車降り稀少野菊に顔近づける
岩崎 照代
紅葉を賞でるは然り千寿園を訪ねる人の流れに酔うとは
池田 禮子
彼岸花残し草刈りし田の畦をふり向く我に花がさ揺らぐ
高木 精
山の端に沈む夕日は美しき手を合わすなり今日の日暮れに
松岡ミチエ

旭志文芸俳句会 12月詠草

小春日や夫と阿蘇路をひと日旅
芹川のり子
間引き菜の浅漬今朝の膳に乗り
出田みどり
三十三才尾羽根振りふりり路
中尾ヨシコ
草深き小径に入りぬ露時雨
水谷 ミネ
柿剥くや縁に差し込む陽の深く
東 芳子
露天風呂舞い来る紅葉肌になれ
中山 栄子
熟れ柿のたわわの里を巡り来し
芹川 蓉子
サイロ詰め一霜降るを待ちてをり
郷 ミヤ子
ふさなりのいずれ残るや木守柿
岩根サチ子
おくれ鳴くつくつく法師九月かな
工藤 房子

泗水短歌会 12月詠草

澄み切って煙突も正月しとる
光堀 善教
思い直し 死んだつもりで出直そう
荒木 玄海
旅先で何の洗濯したるか
高倉 新米
思い直し今の亭主で我慢しゅう
高木 房恵
勝手なもん 自国の核は棚に上げ
太田 雄三
ああ寒さ 膝坊主では温くもらん
小川 繁美
思い直しこの子の為エ生き抜こう
窪田 明徳
入浴剤昨夜は別府きよう箱根ひとり冬の温泉楽しむ
大島 きと
柿の葉は落ち実は熟す樹の影が冬しんと吾に攻めくる
長尾はるみ
結納の日取り決まりし女の孫よ春には花嫁此の家を去るか
平嶋きくえ
初成りの富有柿見ずに夫逝きぬ耀う朱を挽ぐにためらう
古田のぶ子
健やかなる夫と廻りし旅いくたび古き写真を見つ
増田久美子
つ数うる
幼き日夢を呉れたる吾が母の枕辺に置くポインセチアを
吉安 永子